大畑眞壽美の読書日記

最果タヒ『死んでしまう系のぼくらに』の巻

今回は最果タヒ氏の「死んでしまう系のぼくらに」です
この人は 1986 年、神戸市生まれ。第 44 回現代詩手帖賞、第 13 回中原中也賞受賞。
本詩集で 2015 年現代詩花椿賞を受けました。
(2014 年 9 月リトルモア発行)

全 44 作品の内 20 がネットで、また 6 がネット発表後加筆修正したもの。

もくじを見て驚いた
作品本文が縦書きはもくじも縦書き、横書きはもくじも横書き。
そして横書きは全てネットで「〇〇の詩」として発表した作品。
だから、もくじのページは縦書きと横書きがうまく(?)交差している。チェック模様みたいに。その上でもくじの役割を果たしている！

心惹かれる詩がたくさん。
まず最初の詩を全文紹介しよう。

死者は星になる
だから、きみが死んだ時ほど、夜空は美しいのだろうし、ぼくは、それを少しだけ、期待している。
きみが好きです。
死ぬこともあるのだという、その事実がとても好きです。
いつかただの白い骨に。
いつかただの白い灰に。白い星に。
ぼくのことをどうか、恨んでください。

望遠鏡の詩

扶養家族がいて、今後の生活不安がある家庭ではそうも言ってられまいと思う。
思うけど、その死は広大な世界に開かれている気がする。

「恋文」
死がわくとき、その頭上のあめつぶに、白いカササギが 1 羽とまること、てんという足音が小さく響くことに、あまりにも騒がしい葬儀の中で、人はいつまでも気づけずにいる。死の周囲はいつでもうるさ

く、喧噪。粗い粒子の会話がゆきかい、しんだひとにちかいひとほど、口をつぐむ。(略)
いつかかならず裏切られるのに、わたしはきみが死ぬこと、永遠にゆるせない。

死者との別れを前に、声にならない激しい慟哭を聞くようだ。
これは読売新聞に初出している。縦書きだ。

不幸であれば許される気がした
愚かなのは自分だということを忘れて、他者をにくむこと
ぼくのマッチ　線香に火をつけるため
きみが死んだと聞いたから　きみに恋をしたんです
愛する人を失うショックで
いい絵を描きたい、詩を書きたい

マッチの詩

愛する人を失ったら、いい絵を描きたい、詩を書きたいとなるのでしょうか
それは永遠の別れとは真逆では？

しにたいような消えたいような
水族館に行きたいだけのような心地で、街をあるく時間。(略)
しにたいような消えたいような、水族館に行きたいだけのような、チューインガム
みたいな切なさのために、わたし、死ぬ必要なんてないよ。
口を隠して、鼻を隠して、
世界からわたしを見えなくすればいいだけの、簡単な自殺をしよう。

マスクの詩

なるほど！
コロナが流行ってから人々はみんなちょっと自殺したくて、マスクで顔を隠しているのかもね。このタイトルも含めての詩だね。

あれもこれも知って欲しいがそうもいかない。

あとがきで彼女はいう
私達は言葉の為に、意味の為に生きているわけではなくて、どれも私達の為に存在している。
意味付けるため、名付けるための言葉を捨てて、無意味で、明瞭ではなく、それでも、その人だけ

の、その人から生まれた言葉があれば。（略）
あなたの言葉があなたの中にあることを知って欲しかった。